

## 音感教育の歴史的考察 《概要》

2013年

### 【研究の目的】

音楽教育の目的はさまざまです。例えば小学校の音楽科では、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」（小学校学習指導要領解説 音楽編）を目標としています。ヤマハ音楽研究所は音楽教育の中で「聴く力」に焦点を当てた研究に2011年度から取り組み、「ヤマハ音楽教育システム在籍生の『聴く力』を測定する調査手法に関する研究」（2011年度）および「音感教育に関する調査」（2012年度）という論稿をまとめました（いずれも同研究所報告書所収）。

「聴く」という行為を、単に音の高低を正確に捉えることではなく、音や音楽の諸要素に対する感覚を研ぎ澄ますことと広義に定義した場合、聴く力を養うことは「音感教育」と深くかかわってきます。そこで、本レポートでは2011～2012年度の研究活動の一環として音感教育の源流と戦後の展開について整理することを試みました。

今日、「音感」という用語が絶対音感と同義で用いられることが多いのに対し、戦前の音感教育は絶対音感と和音感とを養うことを目指していました。また、先駆者であるピアニストの園田清秀氏は基本和音から不協和音へと段階的な教育法を提示しました。こうした視点は、現代の音楽教育メソッドを考えるうえでも示唆に富んでいると言えるでしょう。

### 【調査レポートの構成】

1. 音感教育の流れ
  - 1-1. 「音感」の意味
  - 1-2. 音感教育における「音感」
  - 1-3. 音感教育の始まり
  - 1-4. 笈田光吉の音感教育
2. 戦後の展開
  - 2-1. 音感教育の普及
  - 2-2. 音楽教室の広まり
    - 2-2-1. 音大附属の音楽教室
    - 2-2-2. 絶対音感育成を掲げる音楽教室
    - 2-2-3. 楽器メーカーによる音楽教室
  - 2-3. 海外のメソッド